

与謝野晶子 訳

# 源氏物語

薄雲卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

薄雲

紫式部

與謝野晶子訳

さくら散る春の夕のうすぐもの涙とな  
りて落つる心地に  
(晶子)

冬になつて来て川沿いの家にいる人は心細い思いをすることが多く、氣の落ち着くこともない日の続くのを、源氏も見かねて、

「これではたまらないだろう、私の言っている近い家へ引越す決心をなさい」

と勧めるのであったが、「宿變へて待つにも見えなくなりぬればつらき所の多くもあるかな」という歌のように、恋人の冷淡に思われることも地理的に斟酌をしなければなら  
ないと、しいて解釈してみずから慰めることなどできなくなつて、男の心を頭わに見  
なければならぬことは苦痛であらうと明石は躊躇をしていた。

「あなたがいやなら姫君だけでもそうさせてはどう。こうしておくことは将来のためにどうかと思う。私はこの子の運命に予期していることがあるのだから、その暁を思うともったいない。西の対<sup>たい</sup>の人が姫君のことを知っていて、非常に見たがっているのです。しばらく、あの人に預けて、袴着<sup>はかまぎ</sup>の式なども公然二条の院でさせたいと私は思う」

源氏はねんごろにこう言うのであったが、源氏がそう計らおうとするのでないかは、明石が以前から想像していたことであつたから、この言葉を聞くとはっと胸がどろいた。

「よいお母様の子にしていただきましても、ほんとうのことは世間が知っていました、何かと噂<sup>うわさ</sup>が立ちましては、ただ今の御親切がかえつて悪い結果にならないでしょうか」  
手放しがたいように女は思うふうである。

「あなたが賛成しないのはもつともだけれど、継母の点で不安がつたりはしないでおおきなさい。あの人は私の所へ来てずいぶん長くなるのだが、こんなかわいい者のできないのを寂しがってね、前齋宮<sup>ぜんさいぐう</sup>などは幾つも年が違っていない方だけれど、娘として世話をすることに楽しみを見いだしているようなわけだから、ましてこんな無邪気な人にはどれほど深い愛を持つかしれない、と私が思うことのできる人ですよ」

源氏は紫の女王によわうの善良さを語った。それはほんとうであるに違いない、昔はどこへ源氏の愛は落ち着くものか想像もできないという噂うわさが田舎いなかにまで聞こえたものであった源氏の多情な、恋愛生活が清算されて、皆過去のことになったのは今の夫人を源氏が得たためであるから、だれよりもすぐれた女性に違いないと、こんなことを明石は考えて、何の価値もない自分は決してそうした夫人の競争者ではないが、京へ源氏に迎えられて自分が行けば、夫人に不快な存在と見られることがあるかもしれない。自分はどうなるもこうなるも同じことであるが、長い未来を持つ子は結局夫人の世話になることであろうから、それならば無心でいる今のうちに夫人の手へ譲ってしまおうかという考えが起こつてきた。しかしまた気がかりでならないことであろうし、つれづれを慰めるものを失つては、自分は何によつて日を送ろう、姫君がいるためにたまさかに訪ねたずてくれる源氏が、立ち寄つてくれることもなくなるのではないかとはんもん煩悶されて、結局は自身の薄倖はうしやうを悲しむ明石であつた。尼君は思慮のある女であつたから、

「あなたが姫君を手放すまいとするのはまちがっている。ここにおいでにならなくなることは、どんなに苦しいことかはしれないけれど、あなたは母として姫君の最も幸福になることを考えなければならない。姫君を愛しないでおつしやることでこれはありませ

んよ。あちらの奥様を信頼してお渡しなさいよ。母親次第で陛下のお子様だって階級ができるのだからね。源氏の大臣がだれよりもすぐれた天分を持つていらつしやりながら、御位みくらいにお即きにならずに一臣下で仕えていらつしやるのは、大納言さんがもう一段出世ができずにお亡かくれになつて、お嬢さんが更衣こういにしかねなかつた、その方からお生まれになつたことで御損をなすつたのですよ。まして私たちの身分は問題にならないほど恥ずかしいものなのですからね。また親王様だつて、大臣の家だつて、良い奥様から生まれたお子さんと、劣つた生母を持つお子さんとは人の尊敬のしかたが違ふし、親だつて公平にはおできにならないものです。姫君の場合を考えれば、まだ幾人もいらつしやるりつぱな奥様方のどつちかで姫君がお生まれになれば、当然肩身の狭いほうのお嬢さんにおなりになりますよ。一体女というものは親からたいせつにしてみらうことで将来の運も招くことになるものよ。袴着はかまぎの式だつても、どんなに精一杯のことをしても大井の山荘ですることでははなやかなものになるわけではない。そんなこともあちらへおまかせして、どれほど尊重されていらつしやるか、どれほどりつぱな式をしてくだすつたかと聞くだけで満足をすることになさいね」

と娘に訓おしえた。賢い人に聞いて見ても、占いをさせてみても、二条の院へ渡すほうに

姫君の幸運があるとばかり言われて、明石は子を放すまいと固執する力が弱って行つた。源氏もそうしたくは思いながらも、女の気持ちを尊重して言うことはしなかった。手紙のついでに、袴着の仕度にかかりましたかと書いた返事に、

何事も無力な母のそばにありましては氣の毒でございます。先日のお言葉のように生おい先が哀れに思われます。しかし、そちらへこの子が出ましてはまたどんなにお恥ずかしいことばかりでしょう。

と言つて来たのを源氏は哀れに思った。源氏はいよいよ二条の院ですることになった姫君の袴着の吉日を選ばせて、式の用意を命じていた。

式は式でも紫夫人の手へ姫君を渡しきりにすることは今でも堪えがたいことに明石は思いながらも、何事も姫君の幸福を先にして考えねばならぬと悲痛な決心をしていた。

乳母めのとと別れてしまわねばならぬことでもあったから、

「氣がめいつてならない時とか、つれづれな時とかに、どんなにあなたの友情が私を助けてくださったかしれないのに、これから先を思うと、お嬢さんのいなくなることといっしょにまたそれがどんなに寂しいことでしょう」

と乳母めのとに言つて明石は泣いた。

「前生の因縁だったのでございましょうね、不意にお宅で御厄介ごやつかいになることになりましたから、長い間どんなに御親切にしていたことでしょう。私の心に御好意は彫えりつけられておりますから、これきり疎遠にいたしますようなことは決してないと思われますし、またごいっしょに暮らさせていただく日の参りますことも信じておりますが、しばらくでも別々になりまして、知らない方たちの中へはいつてまいりますことは苦しゅうございます」

と乳母めのとも言うのであった。こんなことを毎日言っているうちに十二月にもなった。雪や霰みぞれの降る日が多くて、心細い氣のする明石は、いろいろな形でせねばならない苦勞の多い自分であると悲しんで、平生よりもしみみ姫君を愛撫あいぶしていた。大雪になった朝、過去未来が思い続けられて、平生は縁に近く出るようなこともあまりないのであるが、端のほうに来て明石は汀みぎわの氷などにながめ入っていた。柔らかな白を幾枚か重ねたからだつき、頭つき、後ろ姿は最高の貴女きじよというものもこうした氣高けだかさのあるものであらうと見えた。こぼれてくる涙を払いながら、

「こんな日にはまた特別にあなたが恋しいでしょう」  
と可憐かれんに言つて、また乳母めのとに言つた。



雪深き深山みやまのみちは晴れずともなほふみ通へ跡たえずして

乳母も泣きながら、

雪間なき吉野よしのの山をたづねても心の通ふ跡絶えめやは

と慰めるのであった。この雪が少し解けたところに源氏が来た。平生は待たれる人であつたが、今度は姫君をつれて行かれるかと思うことで、源氏の訪れに胸騒ぎのする明石であつた。自分の意志で決まることである、謝絶すればしいてはお言いにならないはずである、自分がしっかりとしていればよいのであると、こんな気も明石はしたが、約束を変更することなどは軽率に思われることであると反省した。美しい顔をして前にすわっている子を見て源氏は、この子が間に生まれた明石と自分の因縁は並み並みののではないと思つた。今年から伸ばした髪がもう肩先にかかるほどになつていて、ゆらとみごとであつた。顔つき、目つきのはなやかな美しさも類のない幼女である。これを手放すことでどんなに苦悶くもんしていることかと思うと哀れで、一夜がかりで源氏は慰

め明かした。

「いいえ、それでいいと思っております。私の生みましたという傷も隠されてしまますほどにしてやっていただかれれば」

と言いながらも、忍びきれずに泣く明石が哀れであった。姫君は無邪気に父君といつしよに車へ早く乗りたがった。車の寄せられてある所へ明石は自身で姫君を抱いて出た。片言の美しい声で、袖をとらえて母に乘ることを勧めるのが悲しかった。

末遠き二葉の松に引き分かれいつか木高きかげを見るべき

とよくも言われないままで非常に明石は泣いた。こんなことも想像していたことである、心苦しいことをすることになったと源氏は歎息した。

「生ひ初めし根も深ければ武隈の松に小松の千代を並べん

気を長くお待ちなさい」

と慰めるほかはないのである。道理はよくわかつていて抑制しようとしても明石<sup>あかし</sup>の悲しさはどうしようもないのである。乳母<sup>めのと</sup>と少将という若い女房だけが従って行くのである。守り刀、天児<sup>あまがっ</sup>などを持って少将は車に乗った。女房車に若い女房や童女などをおおぜい乗せて見送りに出した。源氏は道々も明石の心を思つて罪を作ることには知らず知らず自分はなつたかとも思つた。

暗くなつてから着いた二条の院のはなやかな空気はどこにもあふれるばかりに見えて、田舎に馴<sup>な</sup>れてきた自分らがこの中で暮らすことはきまりの悪い恥ずかしいことであると、二人の女は車から下<sup>お</sup>りるのに躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>さえした。西向きの座敷が姫君の居間として設けられてあつて、小さい室内の装飾品、手道具がそろえられてあつた。乳母の部屋は西の渡殿の北側の一室にできていた。姫君は途中で眠つてしまったのである。抱きおろされて目がさめた時にも泣きなどはしなかった。夫人の居間で菓子を食べなどしていたが、そのうちあたりを見まわして母のいないことに気がつく、かわいいふうに不安な表情を見せた。源氏は乳母を呼んでなだめさせた。残された母親はましてどんなに悲しがつていることであろうと、想像されることは、源氏に心苦しいことであつたが、こうして最愛の妻と二人でこのかわいい子をこれから育てていくことは非常な幸福なことだ

あるとも思った。どうしてあの人に生まれて、この人に生まれてこなかったか、自分の娘として完全に瑕きずのない所へはなぜできてこなかったのかと、さすがに残念にも源氏は思うのであった。当座は母や祖母や、大井の家で見馴なれた人たちの名を呼んで泣くこともあったが、大体が優しい、美しい気質の子であったから、よく夫人に親しんでしまった。女王は可憐かれんなものを得たと満足しているのである。専心にこの子の世話をして、抱いたり、ながめたりすることが夫人のまたとない喜びになって、乳母も自然に夫人に接近するようになった。ほかにもう一人身分ある女の乳の出る人が乳母に添えられた。

袴はかまぎ着ぎはたいそうな用意がされたのでもなかったが世間並みなものではなかった。その席上の飾りが雛遊ひなびの物のようで美しかった。列席した高官たちなどはこんな日にだけ来るのでもなく、毎日のように出入りするのであったから目だたなかった。ただその式で姫君が袴ひもの紐を互いちがいに襷形たすきがたに胸へ掛けて結んだ姿がいっそうかわいく見えたことを言っておかねばならない。

大井の山荘では毎日子を恋しがって明石が泣いていた。自身の愛が足らず、考えが足りなかったようにも後悔していた。尼君も泣いてばかりいたが、姫君の大事がられている消息の伝わってくることはこの人にもうれしかった。十分にされていて袴着の贈り物

などここから持たせてやる必要は何もなさそうに思われたので、姫君づきの女房たちに、乳母をはじめ新しい一重ねずつの華美な衣裳を寄贈おくるだけのことにした。子さえ取ればあとは無用視するように女が思わないかと気がかりに思つて年内にまた源氏は大井へ行つた。寂しい山莊住まいをして、唯一の慰めであつた子供に離れた女に同情して源氏は絶え間なく手紙を送つていた。夫人ももうこのごろではかわいい人に免じて恨むことが少なくなつた。

正月が来た。うらかな空の下に二条の院の源氏夫婦の幸福な春があつた。出入りする顯官たちは七日に新年の拝礼を行なつた。若い殿上役人たちもはなやかに思い上がった顔のそろつてゐる御代みよである。それ以下の人々も心の中には苦勞もあるであらうが、表面はそれぞれの職業に楽しんでつゝいてゐるふうに見えた。

東の院の対たいの夫人も品位の添つた暮らしをしていた。女房や童女の服裝などにも洗練されたよい趣味を見せていた。明石の君の山莊に比べて近いことは花散里はなぢりの強味になつて、源氏は閑暇ひまな時を見計らつてよくここへ来ていた。夜をこちらで泊まつていくようなことはない。性格がきわめて善良で、無邪氣で、自分にはこれだけの運よりないのであるとあきらめることを知つていた。源氏にとってはこの人ほど氣安く思われる夫人は

なかった。何かの場合にも紫夫人とたいした差別のない扱い方を源氏はするのであったから、輕蔑<sup>けいべつ</sup>する者もなく、その方へも敬意を表しに行く人が絶えない。別当も家職も忠実に事務を取っていて整然とした一家をなしていた。

山莊の人のことを絶えず思いやっている源氏は、公私の正月の用が片づいたころのある日、大井へ出かけようとして、ときめく心に装いを凝らしていた。桜の色の直衣<sup>のうし</sup>の下に美しい服を幾枚か重ねて、ひととおりの薰物<sup>たきもの</sup>が焚<sup>た</sup>きしめられたあとで、夫人へ出かけの言葉之源氏はかけに來た。明るいつ夕日の光に今日はいっそう美しく見えた。夫人は恨めしい心を抱きながら見送っているのであった。無邪氣な姫君が源氏の裾<sup>すそ</sup>にまつわってついて来る。御簾<sup>みす</sup>の外へも出そうになつたので、立ち止まって源氏は哀れにわが子をながめていたが、なだめながら、「明日かへりこん」（桜人その船とどめ島つ田を十町<sup>まち</sup>作れる見て歸りこんや、そよや明日歸りこんや）と口ずさんで縁側へ出て行くのを、女王<sup>にやわう</sup>は中から渡殿の口へ先まわりをさせて、中将という女房に言わせた。

船とむる遠方<sup>をちかたびと</sup>人のなくばこそ明日歸りこん夫<sup>せな</sup>とまち見め

物馴<sup>な</sup>れた調子で歌いかけたのである。源氏ははなやかな笑<sup>え</sup>顔<sup>がお</sup>をしながら、

行きて見て明日もさねこんなかなかに遠<sup>を</sup>方<sup>ち</sup>人<sup>かたびと</sup>は心おくとも

と言う。父母が何を言っているとも知らぬ姫君が、うれしそうに走りまわるのを見て夫人の「遠<sup>おち</sup>方<sup>かた</sup>人<sup>びと</sup>」を失敬だと思ふ心も緩和されていた。どんなにこの子のことばかり考えているであらう、自分であれば恋しくてならないであらう、こんなかわいい子供なのだからと思つて、女王はじつと姫君の顔をながめていたが、懷<sup>み</sup>へ抱<sup>か</sup>きとつて、美しい乳を飲ませると言つて口へくくめなどして戯れているのは、外から見ても非常に美しい場面であつた。女房たちは、

「なぜほんとうのお子様にお生まれにならなかつたのでしょうか。同じことならそれであればなおよかつたでしょうにね」

などとささやいていた。

大井の山荘は風流に住みなされていた。建物も普通の形式離れのした雅味のある家なのである。明石は源氏が見るたびに美が完成されていくと思う容姿を持っていて、この

人は貴女きじよに何ほども劣るところがない。身分から常識的に想像すれば、ありうべくもないことと思うであろうが、それも世間と相いれない偏狭な親の性格などが禍わざわいしているだけで、家柄などは決して悪くはないのであるから、かくあるのが自然であるとも源氏は思っていた。逢っている時が短くて、すぐに帰邸を思わねばならぬことを苦しがつて、「夢のわたりの浮き橋か」（うち渡しつつ物をこそ思へ）と源氏は歎かれて、十三絃の出ていたのを引き寄せ、明石の秋の深夜に聞いた上手じょうずな琵琶びわの音ねもおもい出されるので、自身はそれを弾ひきながら、女にもぜひ弾けと勧めた。明石は少し合わせて弾いた。なぜこうまでりっぱなことばかりのできる女であろうと源氏は思った。源氏は姫君の様子をくわしく語っていた。大井の山荘も源氏にとつては愛人の家にすぎないのであるが、こんなふうにして泊まり込んでいる時もあるので、ちよつとした菓子こ、強飯こわいというふうな物くらいを食べることもあった。自家の御堂みどうとか、桂の院かづちとかへ行つて定まった食事はして、貴人の体面はくずさないが、そうかといつて並み並みの妾しやうの家らしくはして見せず、ある点まではこの家と同化した生活をするような寛大さを示しているのは、明石に持つ愛情の深さがしからしめるのである。明石も源氏のその気持ちを尊重して、出すぎたと思われことはせず、卑下もしすぎないのが、源氏には感じよく思われ



た。相当に身分のよい愛人の家でもこれほど源氏が打ち解けて暮らすことはないという話も明石は知っていたから。近い東の院などへ移って行つては源氏に珍しがられることもなくなり、飽かれた女になる時期を早くするようなものである、地理的に不便で、特に思い立って来なければならぬ所にいるのが自分の強味であると思つていたのである。明石の入道も今後のいっさいのことは神仏に任せるといふようなことも言つたのであるが、源氏の愛情、娘や孫の扱われ方などを知りたがつて始終使ひを出していた。報せを得て胸のふさがるようなこともあつたし、名誉を得た氣のすることもある。

この時分に太政大臣が薨去した。国家の柱石であつた人であるから帝もお惜しみになつた。源氏も遺憾に思つた。これまではすべてをその人に任せて閑暇のある地位にいられたわけであるから、死別の悲しみのほかに責任の重くなることを痛感した。帝は御年齢の割に大人びた聡明な方であつて、御自身だけで政治をあそばすのに危げもないのであるが、だれか一人の御後見の者は必要であつた。だれにそのことを譲つて静かな生活から、やがては出家の志望も遂げえようと思われることで源氏は太政大臣の死によつて打撃を受けた氣がするのである。源氏は大臣の息子や孫以上に至誠をもつてあとの仏事や法要を営んだ。今年はだいたい静かでない年であつた。何かの前兆でないかと思わ

れるようなことも頻々<sup>ひんぴん</sup>として起こる。日月星などの天象の上にも不思議が多く現われて世間に不安な気がみなぎっていた。天文の専門家や学者が研究して政府へ報告する文章の中にも、普通に見ては奇怪に思われることで、源氏の内大臣だけには解釈のついて、そして疾<sup>やま</sup>しく苦しく思われることが混じっていた。

女院は今年の春の初めからずっと病氣をしておいでになって、三月には御重体にもおなりになったので、行幸などもあった。陛下の院にお別れになったところは御幼年で、何事も深くはお感じにならなかったのであるが、今度の御大病については非常にお悲しみになるふうであったから、女院もまたお悲しかった。

「今年はきつと私の死ぬ年ということを知っていましたけれど、初めはたいした病氣でもございませんでしたから、賢明に死を予感して言うらしく他に見られるのもいかがと思ひまして功德<sup>くどく</sup>のことのほうも例年以上なことは遠慮してませんでした。参内いたしましてね、故院<sup>こいん</sup>のお話などもお聞かせしようなどとも思っているのですが、普通の気分でいられる時が少のうございましたから、お目にも長くかからないでおりました」

と弱々しいふうで女院は帝へ申された。今年は三十七歳でおありになるのである。しかしお年よりもずっとお若くお見えになってまだ盛りの御容姿をお持ちあそばれるので

あるから、帝は惜しく悲しく思召おもほしめされた。お厄年であることから、はつきりとされない御容体の幾月も続くのをすら帝は悲しんでおいでになりながら、そのころにもつとよく御養生をさせ、熱心に祈祷きとうをさせなかったかと帝は悔やんでおいでになった。近ごろになつてお驚きになつたように急に御快癒かいゆの法などを行なわせておいでになるのである。これまではお弱い方にまた御持病が出たというように解釈して油断のあつたことを源氏も深く歎なげいていた。尊貴な御身は御病母のもとにも長くはおとどまりになることができずに間もなくお帰りになるのであつた。悲しい日であつた。女院は御病苦のためにはかばかしくものもお言われになれないのである。お心の中ではすぐれた高貴の身に生まれて、人間の最上の光榮とする后きさきの位にも自分は上つた。不満足なことの多いようにも思つたが、考えればだれの幸福よりも大きな幸福のあつた自分であるとも思召した。帝が夢にも源氏との重い関係をご存じでないことだけを女院はおいたわしくお思いになつて、これがこの世に心の残ることのような気があそばされた。

源氏は一廷臣として太政大臣に続いてまた女院のすでに危篤状態になつておいでになることは歎なげかわしいとしていた。人知れぬ心の中では無限の悲しみをしていた、あらゆる神仏に頼んで宮のお命をとどめようとしているのである。もう長い間禁制の言葉とし

ておさえていた初恋以来の心を告げることが、この際になるまで果たしえないことを源氏は非常に悲しいことであると思つた。源氏は伺候して女院の御寢室の境に立つた几帳きぢようの前で御容体などを女房たちに聞いてみると、ごく親しくお仕える人たちだけがそこにはいて、くわしく話してくれた。

「もうずっと前からお悪いのを我慢あそばして仏様のお勤めを少しもお休みになりませんでしたのが、積もり積もってどつとお悪くおなりあそばしたのでございます。このごろでは柑子こうじ類すらもお口にお触れになりませんから、御衰弱が進むばかりで、御心配申し上げるような御容体におなりあそばしました」

と歎くのであつた。

「院の御遺言をお守りくださつて、陛下の御後見をしてくださいますことで、今までどれほど感謝して参つたかしれませんが、あなたにお報いする機会がいつかあることと、のんきに思つておりましたことが、今日になりましたはまことに残念でなりません」

お言葉を源氏へお取り次がせになる女房へ仰せられるお声がほのかに聞こえてくるのである。源氏はお言葉をいただいてもお返辞ができずに泣くばかりである。見ている女房たちにはそれもまた悲しいことであつた。どうしてこんなに泣かれるのか、氣の弱さ

を頭わに見せることではないかと人目が思われるのであるが、それにもかかわらず涙が流れる。女院のお若かった日から今日までのことを思うと、恋は別にして考えても惜しいお命が人間の力でどうなることも思われないことで限りもなく悲しかった。

「無力な私も陛下の御後見にできますだけの努力はしておりますが、太政大臣の薨去されましたことで大きな打撃を受けましたおりから、御重患におなりあそばしたので、頭はただ混乱いたすばかりで、私も長く生きていられない気がいたします」

こんなことを源氏が言っているうちに、あかりが消えていくように女院は崩御あそばされた。

源氏は力を落として深い悲しみに浸っていた。尊貴な方でもすぐれた御人格の宮は、民衆のためにも大きな愛を持っておいでになった。権勢があるために知らず知らず一部分の人をしいたげることもできてくるものであるが、女院にはそうしたお過ちあやまもなかった。女院をお喜ばせしようと当局者の考えることもそれだけ国民の負担がふえることであるとお認めになることはお受けにならなかった。宗教のほうのことも僧の言葉をお聞きになるだけで、派手はでな人目を驚かすような仏事、法要などの行なわれた話は、昔の模範的な聖代にもあることであつたが、女院はそれを避けておいでになった。御両親の御

遺産、官から年々定まつて支給せられる物の中から、実質的な慈善と僧家への寄付をあそばされた。であつたから僧の片端にすぎないほどの者までも御恩恵に浴していたことを思つて崩御を悲しんだ。世の中の人は皆女院をお惜しみして泣いた。殿上の人も皆眞黒な喪服姿になつて寂しい春であつた。

源氏は二条の院の庭の桜を見ても、故院の花の宴の日のことが思われ、当時の中宮が思われた。「今年ばかりは」（墨染めに咲け）と口ずさまれるのであつた。人が不審を起すであろうことをはばかつて、念誦堂に引きこもつて終日源氏は泣いていた。はなやかに春の夕日がさして、はるかな山の頂の立ち木の姿もあざやかに見える下を、薄く流れて行く雲が鈍色であつた。何一つも源氏の心を惹くものもないころであつたが、これだけは身に沁んでながめられた。

入り日さす峯にたなびく薄雲は物思ふ袖に色やまがへる

これはだれも知らぬ源氏の歌である。御葬儀に付帯したことの皆終わつたところになつてかえつて帝はお心細く思召した。女院の御母后の時代から祈りの僧としてお仕えして

いて、女院も非常に御尊敬あそばされ、御信頼あそばされた人で、朝廷からも重い待遇を受けて、大きな御祈願がこの人の手で多く行なわれたこともある僧都そうずがあつた。年は七十くらいである。もう最後の行をするといつて山にこもっていたが僧都は女院の崩御によつて京へ出て来た。宮中から御召しがあつて、しばしば御所へ出仕していたが、近ごろはまた以前のように君側くんそくのお勤めをするようにと源氏から勧められて、

「もう夜居よいなどはこの健康でお勤めする自信はありませんが、もつたいない仰せでもございますし、お崩れかぐになりました女院様への御奉公になることと思いますから」

と言いながら夜居の僧として帝に侍していた。静かな夜明けにだれもおそばに人がいず、いた人は皆退出してしまつた時であつた。僧都は昔風に咳せき払いをしながら、世の中のお話を申し上げていたが、その続きに、

「まことに申し上げにくいことでございまして、かえつてそのことが罪を作りますことになるかもしれませんから、躊躇ちゅうちよはいたされますが、陛下がご存じにならないでは相当な大きな罪をお得になることでございますから、天の目の恐ろしさを思いまして、私は苦しみながら亡なくなりますれば、やはり陛下のおためにはならないばかりでなく、仏様からも卑怯者ひきようとしてお憎しみを受けると思ひまして」

こんなことを言い出した。しかもすぐにはあとを言わずにいるのである。帝は何のことであろう、今日もまだ意志の通らぬことがあって、その解決を見た上でなければ清い往生のできぬような不安があるのかもしれない。僧というものは俗を離れた世界に住みながら嫉妬排擠しつとはいせいが多くてうるさいものだそうであるからと思召して、

「私は子供の時から続いてあなたを最も親しい者として信用しているのであるが、あなたのほうには私に言えないことを持っているような隔てがあつたのかと思うと少し恨めしい」

と仰せられた。

「もったいない。私は仏様がお禁じになりました真言秘密の法も陛下には御伝授申し上げました。私個人のことで申し上げにくいことが何ございました。この話は過去未来に広く関聯かんれんしたことでございましてお崩れかぐになりました院、女院様、現在国務をお預かりになる内大臣のおためにもかえって悪い影響をお与えることになるかもしれません。老いた僧の身の私はどんな難儀になりましたも後悔などはいたしません。仏様からこの告白はお勧めを受けてすることでございます。陛下がお妊はらまれになりました時から、故宮はたいへんな御心配をなさいまして、私に御委託あそばしたある祈禱きとうがござい



ました。くわしいことは世捨て人の私に想像ができませんでございました。大臣が一時失脚をなさいまして難儀にお逢いになりましたところ宮の御恐怖は非常なものでございまして、重ねてまたお祈りを私へ仰せつけになりました。大臣がそれをお聞きになりますと、また御自身のほうからも同じ御祈祷をさらに増してするようにと御下命がございまして、それは御位にお即きあそばすまで続けました祈祷でございました。そのお祈りの主旨はこうでございました」

と言つて、くわしく僧都の奏上するところを聞こし召して、お驚きになった帝の御心は恥ずかしさと、恐しさと、悲しさとの入り乱れて名状しがたいものであった。何とも仰せがないので、僧都は進んで秘密をお知らせ申し上げたことを御不快に思召すのかと恐懼して、そつと退出しようとしたのを、帝はおとどめになった。

「それを自分が知らないまままで済んだなら後世までも罪を負つて行かなければならなかったと思う。今まで言つてくれなかったことを私はむしろあなたに信用がなかったのかと恨めしく思う。そのことをほかにも知つた者があるだろうか」

と仰せられる。

「決してございません。私と王命婦以外にこの秘密をうかがい知つた者はございませ

ん。その隠れた事実のために恐ろしい天の譴さとしがしきりにあるのでございます。世間に何となく不安な気分のございますのもこのためなのでございます。御幼年で何のお弁わきまえもおありあそばさないころは天もとがめないのでございますが、大人におなりあそばされた今日になって天が怒りを示すのでございます。すべてのことは御両親の御代みよから始められなければなりません。何の罪とも知し召しさないことが恐ろしゅうございますから、いったん忘却の中へ追ったことを私はまた取り出して申し上げました」

泣く泣く僧都の語るうちに朝が来たので退出してしまった。

帝みかどは隠れた事実を夢のようにお聞きになって、いろいろと御煩悶はんもんをあそばされた。故院のためにも済まないこととお思われになったし、源氏が父君でありながら自分の臣下となっているということももつたいなく思召された。お胸が苦しくて朝の時が進んでも御寢室をお離れにならないのを、こうこうと報しせがあつて源氏の大が驚いて参内した。お出ましになって源氏の顔を御覧になるといつそう忍びがたくおなりあそばされた。帝は御落涙になった。源氏は女院をお慕いあそばされる御親子の情から、夜も昼もお悲しいのであろうと拝見した、その日に式部卿親王しきぶきょうの薨去が奏上された。いよいよ天の示しが急になったというように帝はお感じになったのであった。こんなころであつた

からこの日は源氏も自邸へ退出せずとおそばに侍していた。しんみりとしたお話の中で、

「もう世の終わりが来たのではないだろうか。私は心細くてならないし、天下の人心もこんなふうに不安になっている時だから私はこの地位に落ち着いていられない。女院がどう思召すかと御遠慮をされていて、位を退くことなどは言い出せなかったのであるが、私はもう位を譲って責任の軽い身の上になりたく思う」

こんなことを帝は仰せられた。

「それはあるまじいことでございます。死人が多くて人心が恐怖状態になっておりますことは、必ずしも政治の正しいのと正しくないのによることではございません。聖主の御代にも天変と地上の乱のございますことは支那にもございました。ここにもあつたのでございます。まして老人たちの天命が終わって亡くなつてまいりますことは大御心におかけあそばすことではございません」

などと源氏は言つて、讓位のことを仰せられた帝をお諫めしていた。問題が問題であるからむずかしい文字は省略する。

じみな黒い喪服姿の源氏の顔と竜顔とは常よりもなおいっそうよく似てほとんど同じ

もののように見えた。帝も以前から鏡にうつるお顔で源氏に似たことは知っておいでになるのであるが、僧都の話をお聞きになった今はしみじみとその顔に御目が注がれて熱い御愛情のお心にわくのをお覚えになる帝は、どうかして源氏にそのことを語りたいと思召すのであったが、さすがに御言葉にはあそばしにくいことであつたから、お若い帝は羞恥しゆうちをお感じになつてお言い出しにならなかつた。そんな間帝はただの話も常よりはなつかしいふうにお語りになり、敬意をお見せになつたりもあそばして、以前とは変わった御様子がかがわれるのを、聡明そうめいな源氏は、不思議な現象であると思つたが、僧都がお話し申し上げたほど明確に秘密を帝がお知りになつたとは想像しなかつた。帝は王命婦おうみゆうぶにくわしいことを尋ねたく思召したが、今になつて女院が秘密を秘密とすること  
に苦心されたことを、自分が知つたことは命婦にも思われたくない、ただ大臣にだけほのめかして、歴史の上にこうした例があるということを聞きたいと思召されるのであつたが、そうしたお話をあそばす機会がお見つかりにならないためにいよいよ御学問に没頭あそばされて、いろいろの書物を御覧になつたが、支那にはそうした事実が公然認められてゐる天子も、隠れた事実として伝記に書かれてある天子も多かつたが、この国の書物からはさらにこれにあたる例を御発見あそばすことはできなかつた。皇子の源氏に

なった人が納言になり、大臣になり、さらに親王になり、即位される例は幾つもあった。りっぱな人格を尊敬することに託して、自分は源氏に位を譲ろうかとも思召すのであった。

秋の除目じもくに源氏を太政大臣に任じようとあそばして、内諾を得るためにお話をあそばした時に、帝は源氏を天子にしたいかねての思召しをはじめてお洩もらしになった。源氏はまぶしくも、恐ろしくも思つて、あるまじいことに思うと奏上した。

「故院はおおぜいのお子様の中で特に私をお愛しになりながら、御位みくらいをお譲りになることはお考えにもならなかったのでございます。その御意志にそむいて、及びない地位に私がどうしてなれましょう。故院の思召しどおりには私は一臣下として政治に携たづなわらせていただきまして、今少し年を取りました時に、静かな出家の生活にもはいろいろと存じます」

と平生の源氏らしく御辞退するだけで、御心を解したふうのなかったことを帝は残念に思召した。太政大臣に任命されることも今しばらくのことにしたいと辞退した源氏は、位階だけが一級進められて、牛車で禁門を通過する御許可だけを得た。帝はそれも御不満足なことに思召して、親王になることをしきりにお勧めあそばされたが、そう

して帝の御後見をする政治家がいなくなる、中納言が今度大納言になって右大将を兼任することになったが、この人がもう一段昇進したあとであつたなら、親王になつて閑散な位置へ退くのもよいと源氏は思つていた。源氏はこんなふうな態度を帝がおとりあそばすことになつたことで苦しんでいた。故中宮のためにもおかしいようなことで、また陛下には御煩悶はんもんをおさせする結果になつてゐる秘密奏上をだれがしたかと怪しく思つた。命婦は御匣殿みくしげどのがほかへ移つたあとの御殿に部屋をいただいて住んでいたから、源氏はそのほうへ訪ねて行つた。

「あのことをもし何かの機会に少しでも陛下のお耳へお入れになつたのですか」と源氏は言つたが、

「私がどういたしまして。宮様は陛下が秘密をお悟りになることを非常に恐れておいでになりましたが、また一面では陛下へ絶対にお知らせしないことで陛下が御仏とがの咎をお受けになりはせぬかと御煩悶をあそばしたようでした」

命婦はこう答えていた。こんな話にも故宮の御感情のこまやかさが忍ばれて源氏は恋しく思つた。

齋宮さいぐうの女御にょごは予想されたように源氏の後援があるために後宮しうきゆうのすばらしい地位を得て

いた。すべての点に源氏の理想にする貴女らしさの備わった人であったから、源氏はた  
いせつにかしずいていた。この秋女御は御所から二条の院へ退出した。中央の寝殿を女  
御の住居に決めて、輝くほどの装飾をして源氏は迎えたのであった。もう院への御遠慮  
も薄らいで、万事を養父の心で世話をしているのである。秋の雨が静かに降って植え込  
みの草の花の濡れ乱れた庭をながめて女院のことがまた悲しく思い出された源氏は、  
湿ったふうで女御の御殿へ行った。濃い鈍色の直衣を着て、病死者などの多いために政  
治の局にあたる者は謹慎をしなければならないというのに託して、実は女院のために源  
氏は続いて精進をしているのであったから、手に掛けた数珠を見せぬように袖に隠した  
様子などが艶であった。御簾の中へ源氏はいって行った。几帳だけを隔てて王女御は  
お逢いになった。

「庭の草花は残らず咲きましたよ。今年のような恐ろしい年でも、秋を忘れずに咲くの  
が哀れです」

こう言いながら柱によりかかっている源氏は美しかった。御息所のことを言い出し  
て、野の宮に行つてなかなか逢ってもらえなかった秋のことも話した。故人を切に恋し  
く思うふうが源氏に見えた。宮も「いにしへの昔のことをいどしくかくれば袖ぞ露け

かりける」というように、少しお泣きになる様子が非常に可憐で、みじろぎの音も類のない柔らかさに聞こえた。艶えんな人であるに相違ない、今日までまだよく顔を見ることのできないことが残念であると、ふと源氏の胸が騒いだ。困った癖である。

「私は過去の青年時代に、みずから求めて物思いの多い日を送りました。恋愛するのは苦しいものですよ。悪い結果を見ることもたくさんありましたが、とうとう終しまいまで自分の誠意がわかってもらえなかった二つのことがあるのですが、その一つはあなたのお母様のことです。お恨ませしたままお別れしてしまつて、このことで未来までの煩いになることを私はしてしまつたかと悲しんでいましたが、こうしてあなたにお尽くしすることのできることで私はみずから慰んでいるものなのおそれでもおかしくなつたあなたのお母様のことを考えますと、私の心はいつも暗くなります」

もう一つのほうの話はしなかった。

「私の何もかもが途中で挫折ざせつしてしまつたころ、心苦しくてなりませんでしたことがどうやら少しずつよくなつていくようです。今東の院に住んでおります妻は、寄るべのない点で絶えず私の気がかりになつたものですが、それも安心のできるようになりました。善良な女で、私と双方でよく理解し合っていますから朗らかなものです。私がまた



世の中へ帰って朝政に与<sup>あずか</sup>るような喜びは私にたいしたこととは思われないで、そうした恋愛問題のほうがいせつに思われる私なのですから、どんな抑制を心に加えてあなたの御後見だけに満足していることか、それをご存じになっていますか、御同情でもしていただかなければいかありません」

と源氏は言った。面倒<sup>めんどう</sup>な話になって、宮は何ともお返辞をあそばさないのを見て、

「そうですね、そんなことを言って私が悪い」

と話をほかへ源氏は移した。

「今の私の望みは閑散な身になって風流三昧<sup>ざんまい</sup>に暮らしうることと、のちの世の勤めも十分にすることのほかはありませんが、この世の思い出になることを一つでも残すことのできないのはさすがに残念に思われます。ただ二人の子供がごいますが、老い先ははるかで待ち遠しいものです。失礼ですがあなたの手でこの家の名誉をお上げくださって、私の亡<sup>な</sup>くなりましたのちも私の子供らを護<sup>まも</sup>っておやりください」

などと言った。宮のお返事はおおようで、しかも一言をたいした努力で言いになるほどのものであるが、源氏の心はまったくそれに惹<sup>ひ</sup>きつけられてしまつて、日の暮れるまでとどまつていた。

「人聞きのよい人生の望みなどはたいして持ちませんが、四季時々の美しい自然を生かせるようなことで、私は満足を得たいと思っています。春の花の咲く林、秋の野のながめを昔からいろいろに優劣が論ぜられていますが、道理だと思つて、どちらかに加担のできるほどのことはまだだれにも言われておりません。支那では春の花の錦が最上のものに言われておりますし、日本の歌では秋の哀れが大事に取り扱われています。どちらもその時その時に感情が変わつていつて、どれが最もよいとは私らに決められないのです。狭い邸やしきの中でも、あるいは春の花の木をもつぱら集めて植えたり、秋草の花を多く作らせて、野に鳴く虫を放しておいたりする庭をこしらえてあなたがたにお見せしたく思います、あなたはどちらがお好きですか、春と秋と」

源氏にこうお言われになった宮は、返辞のしにくいことであるとは思ひになったが、何も言わないことはよろしくないとお考えになつて、

「私などはまして何もわかりはいたしませんで、いつも皆よろしいように思われますけれど、そのうちでも怪しいと申します夕べ（いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけり）は私のためにも亡なくなりました母の思い出される時になつておりまして、特別な気がいたします」

お言葉尻のしどけなくなってしまう様子などの可憐さに、源氏は思わず規を越した言葉を出した。

「君もさは哀れをかはせ人知れずわが身にしむる秋の夕風

忍びきれないおりおりがあるのです」

宮のお返辞のあるわけもない。腑に落ちないとお思になるふうである。いったんおさえたものが外へあふれ出たあとは、その勢いで恋も恨みも源氏の口について出てきた。それ以上にも事を進ませる可能性はあったが、宮があまりにもあきれてお思になる様子の見えるのも道理に思われたし、自身の心もけしからぬことであると思ひ返されまして源氏はただ歎息をしていた。艶な姿ももう宮のお目にはうとましいものにばかり見えた。柔らかにみじろぎをして少しづつあとへ引つ込んでお行きになるのを知って、「そんなに私が不愉快なものに思われますか、高尚な貴女はそんなにしてお見せになるものではありませんよ。ではもうあんなお話はよしませうね。これから私をお憎みになつてはいけませんよ」

と言つて源氏は立ち去つた。しめやかな源氏の衣服の香の座敷に残っていることすらを宮は情けなくお思ひになつた。女房たちが出て来て格子こうしなどを閉しめたあとで、

「このお敷き物の移り香の結構ですこと、どうしてあの方はこんなにすべてのよいものを備えておいでになるのでしょうか。柳の枝に桜を咲かせたというのはあの方ね。どんな前生ぜんしやうをお持ちになる方でしょう」

などと言ひ合つていた。

西の対に歸つた源氏はすぐにも寢室へはいらずに物思わしいふうで庭をながめながら、端の座敷にからだを横たえていた。燈籠とうろうを少し遠くへ掛けさせ、女房たちをそばに置いて話をさせなどしているのであつた。思つてはならぬ人が恋しくなつて、悲しみに胸のふさがるような癖がまだ自分には残つていたのでないかと、源氏は自身のことながらも思われた。これはまったく似合わしからぬ恋である、おそろしい罪であることはこれ以上であるかもしれぬが若き日の過失は、思慮の足らないためと神仏もお許しになつたのであらう、今もまたその罪を犯してはならないと、源氏はみずから思われてきたことによつて、年が行けば分別ができるものであるとも悟つた。

王女御は身にしむ秋というものを理解したふうにお返辞をされたことすらお悔やみに

なった。恥ずかしく苦しくて、無気味で病氣のようになっておいでになるのを、源氏は素知らぬふうで平生以上に親らしく世話などやいていた。

源氏は夫人に、

「女御の秋がよいとお言いになるのにも同情されるし、あなたの春が好きなことにも私は喜びを感じる。季節季節の草木だけでも気に入った享樂をあなたがたにさせたい。いろいろの仕事も多く持つていてはそんなことも望みどおりにはできないから、早く出家が遂げたいものの、あなたの寂しくなることが思われてそれも実現難になりますよ」などと語っていた。

大井の山莊の人もどうしているかと絶えず源氏は思いやっているが、ますます窮屈な位置に押し上げられてしまった今では、通って行くことが困難にばかりなった。悲觀的に人生を見るようになった明石<sup>あかし</sup>を、源氏はそうした寂しい思いをするのも心からである、自分の勧めに従って町へ出て来ればよいのであるが、他の夫人たちといっしょに住むのがいやだと思ふような思い上がりすぎたところがあるからであるから見ながらも、また哀れで、例の嵯峨<sup>さが</sup>の御堂の不断の念仏に託して山莊を訪ねた。住み馴<sup>な</sup>れるにしたがつてますます凄<sup>すじ</sup>い気のする山莊に待つ恋人などというものは、この源氏ほどの深い愛情を

持たない相手をも引きつける力があるであろうと思われる。ましてたまさかに逢えたことで、恨めしい因縁のさすがに浅くないことも思つて歎く女はどう取り扱つていいかと、源氏は力限りの愛撫を試みて慰めるばかりであつた。木の繁つた中からさす篝の光が流れの螢と同じように見える庭もおもしろかつた。

「過去に寂しい生活の経験をしていなかったら、私もこの山荘で逢うことが心細くばかり思われることだろう」

と源氏が言うのと、

「いさりせしかげ忘れぬ篝火は身のうき船や慕ひ来にけん

あちらの景色によく似ております。不幸な者につきもののような灯影でございます」と明石が言った。

「浅からぬ下の思ひを知らねばやなほ篝火の影は騒げる

だれが私の人生観を悲しいものにさせたのだろう」

と源氏のほうからも恨みを言った。少し閑暇ひまのできたころであつたから、御堂みどうの仏勤めにも没頭することができて、二、三日源氏が山荘にとどまっていることで女は少し慰められたはずである。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---